慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	楊絳の語り 散文七編
Sub Title	Seven essays by Yang Jiang
Author	櫻庭, ゆみ子(Sakuraba, Yumiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.38 (2023.) ,p.182 (33)- 214 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20230630-0182

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

楊絳の語り　散文七編

櫻庭ゆみ子

初めに

二〇一六年に百四歳[1]でこの世を去った中国の作家、楊絳（ようこう・Yang Jiang）の晩年の散文をいくつか紹介する。楊絳はペンネームで、本名の楊季康の「楊」姓に「季康」の反切[2]の「絳」を組み合わせたもの、一九四三年日本軍占領下の上海で好評を博した喜劇「称心如意（お気に召すまま）」執筆時に紙面に登場して以来、その後七十年にわたる執筆活動において一貫してこのペンネームが使われている[3]。日本で楊絳の名が知られるようになったのは、文化大革命（一九六六―一九七六）後、文化統制が緩みはじめた一九八一年、七十歳で発表した『幹校六記』[4]からで、邦訳はその後一連の回想録、エッセイ、そして小説とともに故中島みどり氏の丁寧な翻訳と詳細な解説で読むことができる[5]。

楊絳について筆者はすでに他でも紹介してきたが[6]、日本ではまだ広く一般に知られた作家ではないので、作品理解

に関わる教育、言語環境を中心に簡単に紹介しておく。[7]

楊季康こと楊絳は一九一一年七月十七日、読書人家庭の第四女として北京で生まれる。両親は江蘇省無錫出身。父、楊蔭杭（一九七八―一九四五）[8]は早稲田大学に学んだ後、ペンシルバニア大学で法学修士号を得て一九一〇年に帰国。江蘇省高等審判庁長、浙江省高等審判庁長などを経て一九一五年から一九一九年にかけて京師高等審判庁長を任じる。一九一五年に四歳となった楊絳は、貝満幼児院、第一蒙養院（幼稚園にあたる）に通った後、一九一七年秋、北京内城西側にあった女子高等師範付属小学校に入学する。のちに北京女子師範大学で魯迅と対立することになる叔母の楊蔭榆（一八八四―一九三八）はこの時女子高等師範の「学監」だった。[9]小学校入学前の七月一日、清朝廃帝、愛新覚羅溥儀を復位させようとした「張勲復辟」が起きる。十二日間にわたった騒乱の間に経験した出来事を少女の視点からスケッチ風に描いたのがエッセイ「張勲復辟」である。そして小学校二年時の一九一九年五月四日、後に「五四運動」と呼ばれる政治文化運動が始まる。エッセイ「五四運動」はその時の学生のデモを人力車に乗って見た経験を描いたもの。同年秋、父、楊蔭杭が北京での職を辞し、一家は無錫に移る。楊絳は「大王廟」で描かれた地元の小学校に入るが、六か月後の一九二〇年二月、姉たちと共に上海のフランス系カトリックの女学校、啓明女校[10]に移る。一九二三年、一家は蘇州に移り、楊絳も上海の啓明女校から蘇州振華女校へ転校、一九二八年夏の卒業にあたり清華大学を希望するも、この年清華大学が南方地域の学生募集に女子枠を設けなかったため蘇州の東呉大学に入学、政治学を専攻、含真というペンネームで「倒影」というエッセイを校内雑誌に寄せる。これが印刷物として刊行された最初の文章となる。一九三二年、大学紛争が起こり授業が停止、楊絳は学友と共に北京に行き清華大学の聴講生となる。この時後に夫となる銭鍾書[11]と出会う。東呉大学からは優秀な成績での卒業を認められ、一九三三年、清華大学大学院に

入学。梁宗岱（一九〇三―一九八三）の《法国文学》、呉密（一八九四―一九七八）の《中西詩比較》、朱自清（一八九八―一九四八）の《散文》といった中国文学史上著名な詩人でもあった教授たちが開講した授業を選択している。朱自清の《散文》では、課題として提出した散文「収脚印」が『大公報・文芸副刊』に掲載される。[12] 一九三四年には、二人の男子学生から思いを寄せられた女子学生の打算的な恋心をコミカルに描いた小説「璐璐、不用愁」を執筆、これも朱自清が『大公報』に投稿し、のち一九三六四年、林徽因（一九〇四―一九五五）編集『大公報文副刊小説選』[13]に収録される。銭鍾書が義和団事変賠償金奨学金[14]を獲得し、一九三五年、楊絳は銭鍾書と結婚式を済ませ共に英国オックスフォード（途中一時パリ大学）に留学。銭鍾書はエクスター・カレッジにて英文学を専攻し、楊絳は学びたい文学部が女子学生の定員超えで空きがなく、やむなく聴講生となる。留学中に一人娘の銭媛が生まれる。オックスフォードでは銭鍾書は清華大学学生時代から堪能だった英語、ドイツ語に加えて、フランス語、イタリア語、ラテン語（後にスペイン語、ギリシャ語）と原書講読の範囲を広げていく。現在、銭鍾書が一九三五年から六十年間にわたって書き継いだ三万五千頁にわたる読書ノート『銭鍾書手稿集』[15]を見ることができるが、そのうちの『外文筆記』での言及はギリシャ哲学に始まりジョージ・オーウェル等の当時の同時代文学まで、哲学、言語学、文芸理論、心理学、人類学等々広範な領域にわたる英仏独伊西ラテン各国の原書三千冊余りにのぼる（実際に読んだものはこの数にとどまらず）。うち英語フランス語のものについては楊絳も多くを読んだと思われる。夫婦はこのほか中国から多数の古典の書籍を携えており、二人は、日中はボードリアン図書館及び市立図書館に通って主に英仏文学における古典の著作を文学史の系列に従って読み進め、夜は下宿にもどって中国古典の著作を読むといった書籍に没頭する二年間を送る。生涯続くことになる二人の学究生活の基礎はこの留学時代に作られたと言える。

一九三七年夏、二人は日中戦争勃発の報を聞いて帰国を決め郵船Ａｔｈｏｓ Ⅱ号で上海に戻る。銭鍾書は昆明の西南連合大学に招聘されて『文芸復興時期の欧州文学」「当代欧州小説」等の授業を開設、オムニバス形式の講義「欧州文学選読」ではホーマーの詩の講読を担当する。のち、父の銭基博（一八八七―一九五七）に呼ばれて湖南藍田国立師範学院に移り英文系の主任を務めるが、太平洋戦争勃発直前に上海に戻り、以降、日中戦争、国共内戦期、二人は上海市内に避難してきていた銭、楊両家族と共に上海で過ごすことになる。「貧困にある人々窮苦人三則（貧困で苦しむ人々）」はその当時の体験がもとになっている。日本軍占領下の上海では楊絳は三つの喜劇と一つの悲劇を書き、上演されて好評を博す。[16] 銭鍾書の方は、日中戦争末期から国共内戦期に湖南省と上海を往復した体験を虚構化して盛り込んだ恋愛悲喜劇『囲城』[17]を上海の雑誌『文芸復興』[18]に連載し知識人の間で評判となる。この作品は一九九〇年にテレビドラマ化されブームを巻き起こした。楊絳は後に「銭鍾書と『囲城』」と題したエッセイ[19]で、『囲城』をめぐっての創作と現実との関係、銭鍾書の人となりをユーモアを込めて描いている。銭鍾書は『囲城』執筆当時、英文雑誌『書林季刊』（Philobiblon）[20]の編集を担当し、また文言文による文芸評論集『談芸録』を執筆。この『談芸録』及び後にそれを発展させた大著『管錐篇』に窺われるバロック文学への趣向[21]は、楊絳が一九五〇年代から着手する『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』、ラ・サージュ作『ジル・ブラース』といったピカレスク小説、そして『ドン・キホーテ』の翻訳につながる線を見て取ることができる。楊絳は一九四六年に震旦女子文理学院外文系教授となるが、同じ頃いくつかの短編小説を執筆し『文芸復興』に発表、このほか一九四八年、British council in China（英国文化委員会中国地区）が企画した「英国文化叢書」[22]の一冊『一九三九年以来英国小説』[23]の翻訳を担当する。『銭鍾書手稿集』索引にはこの著作で紹介された書籍が多数見られ、銭鍾書・楊絳夫婦は同時代（一九三〇年代）英国文芸界の状況を

紹介するこの論評の翻訳を通じても第二次世界大戦後の英国の出版事情、文化状況への理解を深めていたことが見て取れる。中華人民共和国が成立した一九四九年、二人は清華大学に招聘されるが、当時夫婦が同時に専任になれなかったこと及び後に会議への参加を避けるため楊絳は非常勤講師の身分を選び、大学三年向け「英国小説」の講義を担当する。そして一九五〇年より英訳本から重訳で『小癩子』（『ラサリーリョ・デ・トルメスの生涯』）の翻訳を始める。このタイトルの「小癩子」の命名から語句の注釈まで銭鍾書が協力しているが[24]、翻訳は以後三十年余年にわたり幾度も修訂改訂が行われ、その都度英語版、フランス語版、スペイン語版の様々な版本が比較検討され、最終的にはスペイン語原文から中訳を完成させている。

中国では、中華人民共和国成立前後から知識人への圧力が強められ、一九五一年に三反（反汚職、反浪費、反官僚主義）運動が始まり、以後思想改造教育、言論統制が更に強化されていく。翌年、高等機関の改組が行われ、夫婦は文学研究所（現在の中国科学院前身）外文組に配属される。任務は英文学だったが楽しみで始めた[25]『ジル・ブラース』のフランス語からの翻訳を一九五四年に完成させ『世界文学』に連載しているが、これもその後何度かにわたって改訂がなされ銭鍾書が注釈等に協力している。この間一九五〇年代から六〇年代にかけてフィールディングやサッカレー、『紅楼夢』、『ドン・キホーテ』等についていくつかの学術論文を書くがそのたびに思想が右寄りであると批判され、結局任務として与えられた『ドン・キホーテ』の翻訳に専念することになる。この頃文学研究所では西欧及びソ連の哲学文芸思想を抄訳紹介する『外国理論家・作家論形象思惟』出版を準備し、うち西欧思想家部分は銭鍾書と楊絳が主だって編集にあたっている[26]。一九六六年五月には文化大革命が始まり、八月、銭鍾書も楊絳も「資産階級学術権威」とされて批判対象になる。楊絳は『ドン・キホーテ』第二部の四分の三まで進んでいた訳稿が没収されたうえ頭髪を

「陰陽頭」（左右の半分だけ髪を剃りあげる）に剃られ、銭鍾書も「十字頭」（十字に剃りを入れる）に剃られるなどの迫害を受ける。[27] 一九七〇年（銭鍾書は一九六九年末）から一九七二年まで夫婦は文学研究所の他の同僚と共に河南省の農村での労働改造に従事させられる。一九七二年、北京に戻った楊絳は返却された原稿をもとに『ドン・キホーテ』の訳を最初からやり直す。また民国期の女学生、資産階級の夫婦間のすれ違いをコミカルに描いた短編等いくつかの小説を執筆する。一九八〇年にこれらを一冊の単行本にまとめ『倒影集』[28]として発表、また一九五〇年代から一九六〇年代にかけて書いたフィールディング、サッカレー、オースティン等の論考を修訂して『春泥集』[29]として刊行、そして先に挙げたように河南省での労働改造の経験を回想した『幹校六記』を一九八一年に発表。これ以降、矢継ぎ早に回想録、エッセイ、文論を書き続け「楊絳」の知名度は上がっていく。一九八七年には文学院の知識人たちが政治運動に翻弄される姿を二人の所員のプラトニックラブを軸に描いた長編小説『洗澡』[30]を刊行。その後も手を休めることなく、回想録、エッセイを次々と発表する。一九九七年愛娘が癌で逝き、翌年伴侶銭鍾書が逝く。深い悲しみを『パイドン』の英語からの翻訳[31]作業に昇華しエッセイも書き続ける。二〇〇二年に娘と夫へ捧げる『私たち三人』[32]を発表、その後も筆を止めることなく、併せて銭鍾書の遺稿の整理保全に尽力し、二〇一三年、百二歳で最後のエッセイ「子供時代の思い出」（今回紹介する「張勲復辟」「五四運動」はこれに含まれる）をしたため、また父、楊蔭杭が一九二〇年代当時編集にあたっていた『申報』や『時報』に掲載した時事評論[33]の編集にいそしむ。そして文革の最中に突然死した愛する妹楊必（一九二二―一九六八）が銭鍾書の指導で翻訳した『虚栄の市』の細かな語句修正を行い[34]、同時に長編小説『洗澡』の後編『洗澡之后』[35]を完成させ、二〇一六年四月、七十二冊に及ぶ『銭鍾書手稿集』の完成を見納めとし、同年五月二十五日未明、眠るように逝く。文字通り書くことと生きることが結びついた人生であ

った。

楊絳は、『幹校六記』にしろその迫害の様をより具体的に描いた「丙午丁未紀事」[36]にしろ過酷な経験もユーモアを交えてさらりと語る。楊絳のテクストの核をなすのは、人間の本質へのあくなき探求心である。彼女は、注意深く人間を観察し、それを一連の物語に仕立てあげるのに巧みであり、日常の些事の中に真実を見て、究極的には、人類社会の「真・善・美」なるものを信じようとする。その姿勢には、いわゆる伝統的な人文主義（人間中心主義、ヒューマニズム）の精神が根底にあることを感じさせる。そして人間社会を観察しそれを作品に反映させるスタイルには、二十歳代に銭鍾書とともにオックスフォードの図書館で読み漁った十七、十八世紀を中心とする英国風俗小説（the stile of manner）の流れを見て取れるのだが、その文体（スタイル）には、二十世紀を生きた中国知識人の厳しい現実が刻印されている。一九四九年に至るまでとそれ以降に間断なく続いた言論統制のもとで鍛えられた洞察の深さがあり、それが、日常の一瞬を切り取るセンスの良さと、言葉の微妙な間合いによって醸し出されたユーモアと共に、時に人生への悲哀とより合わさって、テクストの読後に味わい深い独特の余韻を残すのである。

そしてまた、楊絳の文体は、その成立過程の説明を省略して粗っぽく言えば、中国において二十世紀初頭に始まる教育の近代化とともに推し進められた「白話革命」（現代中国語の書きことば改革）の成果が反映されている。楊絳の文体は、一つの時代状況と一つの個性がうまく融合した、ある意味、五四新文化運動で提唱されたいわゆる「白話」（書き言葉を、整えた形の話し言葉に近づけた現代中国語）の一つの完成体であるともいえる。楊絳のテクストは、伝統的詩文及び『女児英雄伝』『紅楼夢』等の旧白話小説をもとに幼年期より触れた英語フランス語及びギリシャ文化に遡る理性に重きを置く人文主義の精神を吸収して形成された書き言葉で形成され、言葉は平易でありながら、四

字熟語が適宜織り込まれ中国語独特のリズムで整えられている。見過ごせないのはこの世代の中国知識人が獲得した欧米を中心とする外国語の運用能力の高さであり、楊絳の場合は、中国古典の造詣の深さと五か国語で原文を深く読み込む碩学の夫銭鍾書との会話を通じて磨いた翻訳活動が作家の創作と不可分に結びついている点である。

膨大な読書とそして英語、フランス語、スペイン語の翻訳を通じて吸収した古今東西の古典の教養を基盤に人生経験が深みを与え、各テクストは、現代中国のパノラマを楽しみつつなにがしかの学びを得るという古典的な文学の良さを味わうことができる。

もちろん、ＡＩの出現以降、人間なるものの定義が大きく変化する今日、人間の究極的な意志の有無如何といった優れたＳＦが持つ問題意識からすれば、ルネッサンスの人文主義に基盤を置く人間中心主義（ヒューマニズム）の文学は、やや時代遅れな印象を与えるかもしれない。「近代化」と共に歩んだ楊絳のそのテクストは、国民国家という一枚板に亀裂が入り本来の、様々に分岐した様相が垣間見える今日の文学的状況にあって、セピア色の古色蒼然とした色彩を帯びる可能性もある。けれども楊絳のテクストにはふと手に取って読むとほっとさせる何かがある。これは、一つには、巧みに編まれた物語を味わうことで忘却の彼方に押しやられがちな過去の出来事を疑似体験でき、そこかしこで共感を呼び覚まされることに因るのかもしれない。或いは、人間の普遍的な性質に焦点が当てられているため、語られる出来事が時代と地域の異なる異文化の出来事であっても物語の深層にある何かが、いかなる形であれ共同体の一員として生きることで生き延びてきた人間の性（さが）に合致するからだろうか。

例えば、現実に寄り添う形で人生を描く楊絳だが、現実では起こりえないと思われる人知を超えた世界の存在を否定しない。「私の身体が火葬され、消滅したら私の魂はどうなるのだろうか、魂もなくなってしまうのだろうか」と

最後のエッセイ集『走到人生辺上』[37]では魂のありかについて問いかける。共産党政権化ではタブーに抵触する発言を楊絳はさらりと言ってのける。[38]彼女は実は従来より不可知の世界を否定したことはなく、一九八〇年以降はときおりエッセイに混ぜて用心深くそっとその考えを示している。今回、小噺風の「狼と狽」や「魔物先生、楊絳を訪れる」にもみられるが、フィクションと写実の両者を行き来する興味深いエッセイをいくつか書いているのである。人間の力の及ばぬこと、いかんともしがたい運命の前での失敗や挫折を個人の責任に帰すことなく、人間存在の問いかけをやめることなく、最終時には運命を受け入れる。人間を未知なるものとして包括的に捉える視線に支えられたとき、作品は、より柔軟な読みの可能性へと開かれたものになる。楊絳のテクストのほっとさせる感触はここにあるのかとも思う。

そしてまた二十一世紀の日本に生きる私たちにとって、二十世紀を俯瞰させる楊絳のテクストを読むことは、作家が教育を受けた時代に侵略する側であった日本の状況を考察することにもなり、今の日本の状況を考える多くのヒントを与えてくれる。文学作品の読みにルールはない。人間なるものの本質を問う楊絳の語りは、人間が言葉によって意思疎通をはかる存在である以上、今日でも十分に有効であると感じるが、どうだろうか。

今回は、未邦訳のエッセイのうち、愛娘と最愛の伴侶を失った後に書かれた最晩年のエッセイを含む七篇を執筆順に紹介している。尚、翻訳における（　）は原注、【　】は語句レベルの訳注、その他の注釈は文末に示してある。

大王廟[39]

一九一九年――五四運動の年、私は北京女子大付属小学校に上がった。その頃学校では、十二、三歳から十五、六

歳の女子生徒のために新たな髪形や服装規則を定めていた。当時成人した女学生は髪をおさげに結い黒いスカートをはき、幼い女の子たちは一本か二本のおさげに結ってズボンをはいていた。新しい装いでは、十二、三歳から十五、六歳の女子生徒は短めの青のスカートに、一つにまとめたおさげ髪姿となった。運動場での「朝礼」で、先生が二度ほど私の姉の友達（私が崇拝していた美人）にこの新たな装いさせて壇上に上げ、皆に模範として示した。それ以来、私の姉は短いスカートをはき、おさげには絹の白いリボンを付けるようになった。

その年の秋、我が家は北京から無錫に引っ越し、沙巷に家を構えた。それで私はこの沙巷口にある大王廟小学校に通うことになった。

毎日私と姉は一緒に道を歩いて行ったが、無錫の女性たちは老いも若きも短いスカートを見て一様に仰天した。女たちは遠慮会釈なく大声で「ちょっと早く見においで。髪を垂らして腰にスカートたばねとるよ」[40]と知り合いを呼ぶのだ。私はそっと姉の袖を引いて、「お姉ちゃんのこと言ってるよ」とささやいたが、姉は全く意に介さず「放っておきなさい。さっ急いで」と言うのだった。

女子師範大付属小から大王廟小学校への転校は、姉が新たな装いで無錫の路地を歩くような感じだった。

大王廟小学校は大王廟と呼ばれており、元はどこぞと知れぬ王の廟で、大きな講堂に改装され、二人掛けの机が四五列並んでいた。尋常小学課程の四つのクラスがこの大講堂に詰め込まれ、男女合わせて八十名ほどの生徒がいた。私は学期の途中での転入だった。父がちょうど重い病を患っていたため、母がなじみの門番に私と二人の弟を最寄りの小学校に連れて行ってもらったのである。私はもともとは三年生だったが、ここでは最上級クラスへの編入となった。

大王廟の教職員は校長一人と教師一人、これですべてだった。校長先生は穏やかで、凍えて赤くなった鼻の先に透き通った鼻水が引っかかっていた。教員は孫先生といい、剃髪してつるつるのひょうたんのような頭だったので、生徒たちは陰で「孫の坊主頭」と呼んでいた。孫の坊主頭は籐の教鞭を手にし事あるごとに生徒を叩き、特に頭をよく叩いた。どの生徒も皆叩かれたが私は打たれたことがなく、聞き分けのない二人の弟も打たれるのを免れていた。おそらく私たちは特別な生徒だったのだろう。校長は生徒を叩かなかったが、一度だけ怒って手を挙げたことがあった。ただし叩かれたのは生徒ではなく息子だった。その子が怠けて宿題をしなかったのだが、校長先生は怒りのあまり皆の前で息子の（股割れ）ズボンをまくり力任せにお尻を打った。この息子が大声で泣き叫ぶと、父親の方はますます怒りが募りますます激しく打ちすえたので終いには「孫の坊主頭」が駆けつけ止めに入ったのだった。

私は新入生だったので、ルールがわからず、よく的外れで滑稽なことをしでかした。少女たちと「官、打、捉、賊」（北京では「官、打、巡、美」と言った）遊び[41]をすることになり、私は「賊」を引いてパっと駆け出した。皆は気がふれたのかと私を捕まえ「なにやってるのよ」と聞いた。私は焦って答えた。

「私、賊でしょ！」

「しっ、大声だしちゃだめでしょ。なんで叫ぶの！」

愚かな賊の私は、いら立って身を振りほどこうとした。

「私、賊よ。早く逃げなきゃだめじゃない！」

彼女たちは辛抱強く私に教えるしかなかった。「賊ならね、じっと座って見つからないようにしてなくちゃ」

別の子供も言った。「もし捕まったら、叩かれるんだよ」

私は答えた。「賊はすぐ逃げないと、早く走って捕まらないようにしなきゃ」

すると彼女たちはこう答えたのだ。「「女老小姑則」（つまり女の子）は「走って逃げ」ちゃいけない。逃げたり追っかけたりは「男老小」【成人や子供の男】がすることよ。」

「なら女の子は何するの？」私は悔しくなって尋ねた。

「歩歩太陽【日向ぼっこ】（つまり古文の「負暄」【冬の日向ぼっこ】のこと。「負」は「歩」と同じに発音）」と一人が言った。

「お手洗いに行って「羽蹴り」[42]をするの」また一人が言った。

大廟の東側に付いた小部屋が「女便所」で、中におマルがあった。女の生徒がその便所の中で羽蹴りをするのだ。私は縄跳びや毬つきはできるが「毽子」蹴りはできなかったし、空気のよどんだ狭い「女便所」の中で遊びたいとも思わなかった。

誰が書いたのか「孫の坊主頭」の像が「女便所」の壁に貼ってあり、皆がその絵に向かってお辞儀をしていた。孫先生のご機嫌取りをしているのかと思ったら、「鈍」殺しをするためだという。「鈍」とはどういうことかが分からなかった。皆が口々にあれこれ説明したり、手真似をしたりするのを見て、何となく「鈍」とは悪運に巡り合わせることだと分かった。それでもなぜ絵を拝むと相手をだめにさせられたり、殺すことさえできるのかどうも解せなかった。そんなことはこれまで聞いたことすらなかった。のちに何年も経ってから多少古文を学び「鈍」とは『易経』の『屯』掛けの「屯」、すなわち災難に遭うことで難を避ける意味だと分かったのだった。

女子便所は西向きだった。午後になると中庭の大きな槐（エンジュ）の木が窓を通して東の壁に浅黒い影をおとしてゆらゆら動

いた。女の子たちは幽霊だと言って部屋から逃げだした。私が木の影が映っているのだと言っても信じない。影だということを証明するために私が足で蹴っ飛ばすと、彼女たちは怯えて私も幽霊であるかのように遠巻きにして見ている。何とも興ざめだったし、言い争っても仕方がなかった。

その年私は数えで九歳だった。十歳前後の友達が一人か二人いたが、それほど仲が良いわけではなかった。私と同じ机の少女はクラスで一番歳が上で十五歳だった。その子は女の子たちのボスで、喧嘩など紛糾することがあると彼女の一声でことが決まった。年端のいかない少女たちは皆彼女に贈り物をして歓心を買おうとした。ある時、年少の子が焼き立ての薩摩芋を二つ献上したことがあった。ちょうど始業のベルが鳴ったところで食べるのが間に合わない。私とその子の机は列の最後尾で、教壇から最も遠いところにあった。彼女は焼きたての白薯を汚れたハンカチで包むと、鼻をすすって鼻を拭くように見せかけては焼き芋を一口かじった。私ははらはらしながら彼女が食べ終わるのを見ていた。もし「坊主頭」に見つかったなら間違いなく教鞭で頭を叩かれただろう。

大王廟で何を勉強したのかもうすっかり忘れている。ただ国語の教科書の本文に「子曰く、父母の年は知らざるべからず也……」とあった時、「坊主頭」が「子曰く」を「息子が言うには」と説明したことは覚えている。国語の文は声を張り上げて上がり調子で朗誦しなければならなかった[43]。こんな変な声を発しなければならないなんてなんという災難だと思ったものだ。

毎朝、授業の前に、全校の男女の生徒が並んで大きな庭の西側にある菜園に行って体操をした。一番年上の男子生徒が前に立って号令をかけたが、なんと叫んでいるのかよく分からない。舌を巻いて、どの言葉も最後に〝アール〟がついた。その後私は「七アール」「八アール」からこの生徒が叫んでいるのが「一、二、三、四、五、六、七、八」

だということを悟った。あとで「七アール」「八アール」の発音から、ああ、番号を叫んでいるのだ、と悟った。舌を巻いて「アール」と語尾を延ばして、「官話」或いは「国語」のつもりだったのである。[44] 体操の授業ではお腹をマッサージする動作があり、九歳から十歳より年が上の女の子たちは恥ずかしそうにくすくす笑って手を止めてしまったが、私は馬鹿正直に動作をまねて続けたために、女の子たちに笑われた。

大王廟に通ったのは学期の半分にも満たなかったが、当時のことは鮮明に記憶に刻み込まれており、今でも時々大王廟にいるような感じがする。

狼と狽の話[45]

まえおき：親戚に一人地質調査員がいる。以下の話はこの親戚が語った体験である。

俺たち地質調査隊はたくさんのチームに分かれている。俺はドリルチームだった。あるときドリルの先がだめになった。数個あるドリルの先がすべてだめになってしまったんだ。主任からドリルの先を取りに本部まで行ってくれと言われた。本部は大きな町（鎮）に設置され、チームの根拠地からかなり離れたところにある。俺は大急ぎで本部がある町まで行きドリルの先を四本もらい、それを大袋に入れて肩に担ぐと、ともかく急いで帰ろうと思った。町を出るときはすでに黄昏時、その時分は凍てつくような寒さで、昼は短く夜が長いのだ。どっしり重い四つのドリルの先を背負っていては暗くなる前に戻れないかもしれない。けれども作業を遅らせてならじと俺は食べ物をそそくさと口に押し込むと慌ただしく帰途についたんだ。

途中荒涼とした林を通らねばならなかった。大きくはないが縦に長い。樹木は新たに植えた苗で、この長い木の苗の林を突っ切り、ぐるりと曲がりさらに小さな山を越えた先に村があった。この村まで来れば開けた道に出る。

俺は足早に歩いた。林がもう終わるというところで、ふと何かが背後からつけてくる気配がした。この辺りには狼がいる。狼かもしれないが、恐ろしくて振り返ることができない。俺は杖を携えていたし懐中電灯もあった。だが狼は電灯などものともしない。面倒なことにならんようにと祈りながら、俺はひたすら足を速めて前に進んだ。林を抜けると衡山にかかる太陽がちょうど沈もうとするところだった。太陽が山に沈めば残照はあっという間に消える。ぐるりと回って山に登り始めたところであたりが真っ暗になってしまった。

曲がったときに後をつけてくる奴があきらめることを願ったが、相変わらず背後からつけてくる。ここは肝を据えてかからんと、と俺はしばらく行ったところでぐっと腹に力を込め、一喝した。背後をつけてくるやつが驚いて退散するように。山の頂まで来るとすでに月が出ていた。山を下るときには空高く昇っている。小走りで坂を下ったんだが、背後のやつがますます近づいてくる気がする。月は輝いていた。ちらちらと横目で見たところ、影が見えた。後をつけてきたのはなんと一頭の狼ではなく、狼の群れだった。

前方は村だ。すでに農家の敷地も見える。俺は担いでいた大袋をどさっと放り出し、必死の思いで駆け出しながら狂ったように「助けてくれー」と叫んだ、とその瞬間、狼たちが取り囲むように迫ってきた。

村人たちはぐっすり眠り込んでいるし、風向きも逆だったのかもしれない。俺が必死になって叫んでも誰も応えない。月明りの下で、農場の石臼と、それから小屋ほどの高さに積み上げた柴草の山が見えた。もう必死でそれによじ登ると、群れは周りを取り囲んだ。奴らは高く飛びあがれないし、脚が細くて柴草の山によじ登ることができない。

俺はあえぎながら柴草の上にうずくまり、取り囲んだ狼たちが、這い上がろうとして失敗するのを見ていた。しばらくすると、一、二頭が去った。続いてさらに二頭。俺は狼の群れが散っていくのをひたすら待った。ところが残った狼たちは去ろうとせず、依然柴草を取り囲んで動こうとしない。

しばらくすると、二頭が戻ってきた。同時にもう一頭、なんというか熊のような巨大で奇怪な奴が現れたんだ。目を凝らすと熊ではなく、狼二頭が組になっていた。一頭の狼の背中に巨大な一頭が乗っているのだ。狼たちは数頭集まって一頭が担いでいるその巨大な奴を石臼の上に乗せると、巨大な奴とそのほか三、四頭が額を寄せて何やら密談をしているようだった。そしてどうやら巨大な奴が司令を出したようだ。群れのやつらがさっと行列をつくり、一頭が柴草の山から柴草をくわえて抜き出して脇に置くと、次のやつもそれをまねて柴草の山から一束くわえて抜きだし脇に置いた。そうやってやつらが一頭ずつ柴を抜き出していくもんだから、ほどなくして柴草の山に隙間ができ、かしぐ危険が出てきた。俺はもういてもたってもいられなくなって声も枯れんばかりに助けてくれーと叫んだんだが、村は死んだように静まり返り、全くの反応なしだ。

奴らはかわるがわる一束ずつ柴草を引き抜いていく。柴草の隙間がその都度広がってかしぎだし、もう崩れそうだった。崩れ落ちれば俺は奴らの夕飯になっちまうんだ。あのバケモンは恐ろしく頭が回る。狼は柴草の山には登れないがぶつかって崩すことはできる。叫んでも助けは来ないし、空を飛んで逃げることもできない。焦った俺は無意識にタバコを取り出して吸おうとして、ポケットに手を入れてライターをまさぐった。狼は火を恐れるもんだ。もう破れかぶれだった。俺は綿入れを脱ぎライターでそれに火をつけ、風の中でバサバサふるうと、綿入れはめらめらと一気に燃え上がった。その燃えている綿入れを柴草の山に放り投げたところで柴草もボワッと燃え上がった。すでに明

け方の三時頃になっていただろう。俺は再び村の方に向かって「助けてくれー、火事だあ、火事だあ」と叫んだ。

炎と煙に驚いて村人が目を覚まし、我先にと盆やら桶やらをもって消火に駆けつけてきた。狼の群れは散り散りに逃げていった。ただ石臼の上の例のバケモノだけは逃げずにいて村人に捕らえられた。前足がひどく短くて走ることができなかったのだ。奴は狼ではなく、狽だった。

柴草の火はすぐに消された。俺は四つのドリル[46]先の入った袋を拾って戻ったんで、我が業務の進行には支障はきたさなかった。例の狽は村人が華北の動物園に送ったということだ。よく「狼狽為奸【狼と狽は徒党を組んで悪事を働く】」というが、狽を見かけることなどほぼないから、成語の言葉としてのみとらえていたけれど、まったくもってこの目で「狼狽為奸」を見るとは。狽は狼よりずる賢い。だがね、狼の助けがなけりゃ動物園送りになるだけなのさ。

貧困で苦しむ人々[47]

（一）道端の凍死者

上海が日本軍占領下にあった当時、道端でしばしば凍え死んだり餓死した物乞いを目にした。私は歩いて仕事に出かけるのだが、荒れた空き地を通らねばならなかった。ある時、大雪が降ったあとで地表はべたついていたが雪がまだ残っていた。雪の中に凍死か飢え死にした物乞いが一人横たわっていた。だれかが憐れんでぼろの蓆をかけてやったのだが、両足が蓆からにゅっとはみ出ている。通りがかった者が「まだ息がある。両脚が揃ってつま先が上を向いている」というのを耳にした。仕事を終えて帰宅する時、その両足が八の字に開き、つま先が倒れていた。死んだのである。誰かが傍らに紙で作った銭の束を置いていたが、それを死者のために燃やす者はいなかった。死者は雪の中

で一日横たわっていたが、その後「普善山荘」の人々が薄い板張りの棺桶に亡骸を収め野辺送りをするのを目にした。上海には「普善山荘」があってもっぱら「善行を積む」行為を行っており、そこで働く者はそれで糧を得ており「善棍」と呼ばれていた。

ある時、鍾書と私は友人を訪ねに出かけ、歩き疲れたところで土地神を祀った小さな廟を見つけ、少し休もうと敷居に腰かけようとした。と、高さのある敷居の裏側に丸く縮んだ死体が転がっているのが見えた。すでに硬直している。大慌てで私たちはそこを離れた。あの亡骸はいつか誰かが収めてくれただろうか。

（二）施しの粥

抗日戦争が終結した後、私は蒲圓[18]に住んでいた。震旦女学校での授業に出かける時は近道をして学校の裏門から入ることができた。霞飛路（ジェスフィールド通り）の裏手の空き地は「普善山荘」が粥の施しを行う場であり、私が近道を取ると必ず通ることになる場所だった。それでよく物乞いが粥をすすっている姿を目にした。

付近にたむろする物乞いは、いずれもブリキの缶や桶を手に粥の列に整然と並んでいた。誰もが分け前に与ることができたので、先を争う必要はなかったし、二人分は分け与えられなかったからである。粥は濃く熱々で、みな平等に大きな銅製のお玉に二杯分、それはゆうに桶半分はあり、一回では食べきれず二回分は十分にあった。朝の一回は熱々で晩の一回はもちろん冷めたものだった。一日二回の粥で餓死は免れた。粥を施される者はいずれも独り身で単衣のぼろをまとい、ほとんどが日光の当たる場所に陣取ろうとした。古参の乞食は施された粥の器を抱え陽当たりが良く風も吹きつけない場所を選び嬉嬉として食事に取り掛かる。懐から落花生や大根の塩漬けを取り出し粥に添えて

食べることもあった。大多数はただ白粥を黙々とすすっていた。ある時、一人の老人と一人の若者を見かけた。父子のようで、二人して粥をすすっている。服装はまだそれほどみすぼらしくなかったが、二人とも下を向き、人目につかないところに立ち、表情が痛々しかった。おそらく物乞いに迄は落ちぶれてはいなかったものの、家の米の貯えがもう底をついたに違いない。帰宅してから私は鍾書に目にしたことを話した。私たちはこの父子を思い、心が痛んだ。そしてまたよく前に見かけたあの二つの亡骸を思い起した。どうしてあの人たちは粥の施しを受けなかったのだろう。病にかかっていたに違いないか、あるいはもう動けなくなっていたのだろうか。

（三）「盲（めしい）が飢えております」

上海が日本占領下にあった時、銭家が借りていた住まいは大通り沿いにあり、毎日のように「飢えて死にそうです。飢えて死にそうです。盲（めしい）が飢えて死にそうです」と叫ぶ声が聞こえた。出かける際に私はよくこの盲人に出会ったのだが、そのたびに通りを横切って銅貨を一つ握らせた。盲人は両眼をかっと開けたまま、片手にした杖で地面をつき、もう一方の手を前方に伸ばして探りまわった。当時通りにはほとんど車は通らず、ただ二四ルートのトロリーバスとそれから一人乗りか二人乗りの輪タクが通るだけだったので、通りを横切るのはたやすかった。

私は毎日朝食を済ませると二四ルートのトロリーバスで終点まで行き、下車した後しばらく「三不管」【三つの管轄が管理しない無法】地帯を歩き、更に市電に乗り込み終点まで行き、そこで下車して小学校での半日の授業を行った。「三不管」とは公共租界もフランス租界もまた偽政府【汪精衛政権国民党政府】も関与しない地帯で、ならず者の出没する場所であり、授業を終える頃の夜市はとても賑わっていた。人力車夫や輪タクの車夫は一日の労役を終え

たあと、夜、円座して上海蟹の屋台に積まれた死んだ蟹を食べる。文字通り俗にいう「物乞いに死蟹を食べさせる――何でも旨い」である。彼らは通例に倣って生姜のみじん切りも酢も添える。蟹はいずれも縛ってあり大振りだったが、すべて死んだ蟹だった。それでもなんと旨そうに食べること。私は貧しい人々が楽しむ様子を見て大いに興味をそそられた。こちらだって胃の腑は空っぽなのだ。けれどももし歩みを緩めでもしたらたちまちチンピラに目を付けられ、「蟹を食べるかい」と背後から声をかけてくるに違いなかった。私は急ぎ足でその場から去り、振り返ることすらできなかった。

ある時授業を終えて帰宅する途中、つまり上海蟹の屋台の近くの、水道の蛇口が設けられた横の石畳が敷かれた空き地を通った際、例の「飢えて死にそうです」の盲人が蛇口の前に座っているのを見かけた。横に酒を半分ほど注いだ杯を置き、その周りを大勢が取り囲むようにして座っている。盲人は明らかにこの輩たちの頭（かしら）であり、ちょうど手ぶり身振りを交えて長広舌を振るっている最中だった。私はこの盲人をそれとなく見た。盲人の方も私が見ていることに気づいた、とその途端、ギラリと目が光り、ぎょっとした私は恐ろしさのあまり一気に駆け抜けたが、血も凍るような残忍な視線が背後からずっと追ってくるような気がしてたまらなかった。それからは「盲が飢えております」の声が聞こえてくるたびに注意深く避けるようになった。これまでこの盲人を厭ったことはなかったのだが、盲人の両眼（まなこ）の残忍な光は耐えようもなく恐ろしかった。以前フランスの「乞食市場」[49]を読んだことがあり、腕を無くしたり一本足だったりと、満身創痍の物乞いが毎朝どうやって仮装するのかは理解していた。けれども仮装しないこの物乞いを毎日のように目にしながら、相手が本物なのかどうかは疑うことすらしなかった。実に「君子は欺くに其の方を以てすべし」【鮮やかなお手並みである】。あの殺気立った二つの眼光を思い出すと今でもぞくっと寒気が走る。

夜、魔物先生が楊絳を訪れる[50]

昨晩、寝る前に睡眠薬を服用しようとしたら、手が滑って薬瓶を落としてしまった。「ごとん」と音がして瓶は消えた。瓶は円形だから転がるだろうと急いでベッド沿いに隈なく探す。懐中電灯も照らしたが影も形もない。仕方がないのでお手伝いさんを起こして睡眠薬を一粒分けてもらった。彼女はとっくに灯りを消して寝入っていたのだが、私のために電気をつけ、必要な薬を探し出すとあとはまた電気を消して眠ってしまった。

寝室のドアの鍵は普段はかけないことになっている。ところがこの時ドアが大きく開け放たれていたので、取っ手を引いて閉めようとしたところ、ドアの後ろに見るからに恐ろしい幽鬼が立っているではないか。ぎょっとして飛びすさったが、それが魔物だとわかったので、すぐ落ちつきを取り戻した。魔物は斜に構えて見せながらいかにも馬鹿にするように鼻で笑った。

「やはりお前さんは先にお隠れになったあんたの旦那ほどには賢くないねえ。あの方は俺を見ても飛びすさらなかったよ。[51]」

私も笑って答えた。「魔物さん、あの晩はお酒をきこし召していらっしゃってお姿が見えちゃったわね。今晩は仮装してらっしゃらないから一目でわかったわ。それだけでも十分に誇ってもよろしくなくて。」

相手は口をゆがめてふんと笑った。「俺はそんなに軽薄な輩ではないんでね。一つ尋ねるが、神が守ってくれて、俺様をお前さんの閨房からもう追い出しちまってて、この部屋いっぱいに聖なる光が満ち溢れ、邪悪なもんがきれいさっぱり消えちまってるとでも思ってんのかい？」

相手が去る気がないとみて、私は急いで椅子をかかえてくると座布団も敷いて答えた。「まあまずはお座りくださいな。あなたのお尻は冷たいから座る場所を燃やすことはないとわかっていますし。それで何か教えてくださるなら、謹んで拝聴いたしますよ。」

魔物先生、これでようやく機嫌を直し、口元をほころばせると指を突き立てて言った。「あんたはボンクラの愚か者だ、お前さんの神が守ってくれるとでも思ってるのかい。やっこさん俺様には全く太刀打ちできないってのにさ。よく考えてみろな、この世界があいつのものなのかそれとも俺様のものなのかを。」そして自分の鼻を指さした。「おざなりの答えは聞かんからな。」

私はよくよく考えてから答えた。「あなたの方がより勢力を広げてますね。よく「道は一尺、魔は一丈」っていうようにね。今ではもう至る所に戦火が広がってるのに、あなたはさらに火をつけて回ってる。全世界の人間同士、国同士が権力争いをしてますよね。みんなあなたが煽ったものでしょう？　でも正直に言わせていただきますけれど、私は悪を憎むこと仇の如くで、とどのつまりは神の側ですから、あなたには指図されませんよ。私だってはっきりと申し上げられますよ。世の中にはやはりたくさん善人がいるってことを。あなたはご自分を神と比較して、どこでも何でもおできになるということですけれど、それならなぜ忙しくしてらっしゃるの？　見たところ、この世界が滅びたとしたら、あなたも崇拝者と一緒に月まで行って陣取り合戦しなくちゃならなくなりますね。でも誰もあなたと一緒に地獄に下って冥界の邪風を浴びたいとは思わないでしょうね。魔物先生、私の言う通りじゃありませんこと？」

魔物はふんと鼻で嘲笑った。「ご老体、控えめで謙虚だったはずが、どっこいかなり驕ってるじゃないか。己が賢人だと思ってるわけか。見ておれ、お前さんがどれだけ小賢しくしておられるか！」

私は笑って答えた「十分わかりました、もうこれ以上教えを垂れてくださらなくて結構！　もう九十九歳ですからね。小さい頃、はじめて英語を学んだ時は「I am not fear, for God is near.」ってまねて言ってたもんですよ。実際はとても怖がりでしたけどね。神様がお守りくださったので、今の今まであなたに出くわしたことがなかったのですね。でも自分が賢いだなんて金輪際思いませんから。魔物先生、よくわかりましたよ。」

魔物はふんと鼻を鳴らした「お引き取り願いたいってことか。」

「本当にわかりましたってことですよ、これ以上のご講義は結構です。」と私は笑って答えた。

魔物は言った。「One word to the wise is enough【(俺は)一を聞いて十を知るのさ】」そして私が散々探しても見つけられなかった薬瓶を手に持ち、化粧台をコツコツたたいて言った。「瓶は床に落ちてなんぞいない、電気スタンドの脇に落ちたのさ、よく見るんだね。」

魔物の身体の緑の燐光が次第に薄れていく。見えなくなっても、まだ冷たい目で私をじっと見ているのが分かった。

翌朝、ベッドから起き上がってみると、探し回った薬瓶は本当にスタンドの脇にあった。床に落ちてはいなかったのだ。魔物がからかい、教訓も垂れてくれたからには、それを拝聴しなくてはならない。これまで私の心にそれは存在しなかったけれど、今からでも自ら大いに警戒すれば遅くはないだろう。

五四運動[52]

一九一九年の五四運動は現在「青年節」と呼ばれている。当時私は八歳で、その現場にいた。考えてみると、五四運動の際、その現場にいた者は私一人だけになってしまっている。当時は中国国内外の多くの記者がいたに違いない

が、しかし思うに、もう生きてはいないだろう。記者だったとすれば、少なくとも二十歳は超えていただろう、ということは百二十歳近くのはず、生きているはずがない。

閑話休題、ともかく当時私自身が体験したことだけを話しておこう。

その日の朝、私はいつものように三姉と一緒に人力車に乗って辟才胡同の女子師範大学付属小学校に授業に出かけた。この日はいつもと違って、大通りには竹布の長衫【丈の長い男性用の単衣の服】を着て、胸の右側に布切れを付けた学生が大勢いた。私はこれまでこんなに背が高くがっしりした学生たちを見たことがなかった。彼らは大通りをあちこち走り回り、何か重大ごとがあるかのようだったが、当時私は訳が分からず悶々としていたが三姉に尋ねることはしなかった。尋ねたところで姉が知っているはずもなかった。

午後四時に帰宅しようとしたとき、通りの大学生たちは私たちの人力車に大通りを通らせず、蓋のないどぶの対岸の泥道に追いやった。

この泥道は晴れの時は土ぼこりが舞い上がり、雨が降れば泥んことなり、庶民が馬車[53]を使うときはいずれもこの道を通った。通りのわきには荷物の積み下ろしを待っている駱駝がうずくまっている。通りの両側の泥道を通る馬車や人力車は、それぞれを一方通行で通る。私たちの人力車は逆方向だったので、前進できず、それで私たち姉妹は人力車に座って騒ぎを見ることとなった。ただし見えるのは隊列を組んだ学生たちが一斉に小さな旗を掲げ、「日本帝国主義を打倒せよ！」「日貨をボイコットせよ！（最後まで堅持せよ！）」「労働者は神聖である！」「恋愛の自由を！」（私は「恋」という漢字を知らなかったので、「変」と読んでいた）とスローガンを口々に叫ぶ姿だった。一つの隊列が過ぎるとまた一つの隊列が続く。人力車の中にいた私と姉にとっては面白くもなんともなかった。幸い私たちの車は

東斜家の付近に停まっていたので、二人で車を降りて少し歩くと家に着いたが、父さんと母さんが私たちの帰宅を待っているところだった。

張勲復辟

張勲復辟は民国六年の事である。私は民国と同年の誕生なので、六歳になっていた。もう小さな子供ではないので、はっきりと覚えている。

当時、張勲の兵がもっぱら役人の家をねらって強奪するというううわさが流れ、役人たちはいずれも家族を伴って天津へと逃げ出したため、当日北京から天津までの列車の切符はすべて売り切れてしまった。

ただ外国人の家の門の前には見張りの兵士が立ち、主人の許可がなければ誰も門から入らせなかった。父さんはBolton（波爾登）という外国人の友人に電話で状況を説明し、氏の家に数日避難できないかと尋ねた。ボルトン氏は「早くおいでなさい。もうかなりの人が来ていますよ」と仰った。

当時私の三姑母（楊蔭榆のこと）は一人で学校の宿舎にいた（当時すでに夏休みに入っていた）が、怖がって電話で母さんに彼女もボルトン家に受け入れてもらえないかと尋ねた。母さんはそれで、食後にすぐこちらにいらして私を連れて一足先にボルトン宅に行ってくださいと答えたのだった。

母さんは私を一番きれいな服に着替えさせた。白地に赤い花のついた単衣の長い中国服で、私はそれを着て万牲園（今の動物園）に行き孔雀に羽を広げてもらおうかと思ったくらいだった。三伯伯（編集者注：三姑母のこと。旧事叔母を伯伯と呼んだ）は人力車に乗って我が家にやってきたのだが、人力車は門の外に待たせた。そして私を抱いて

横に座らせた。これまで行ったことのない家に到着すると、三伯伯は片手で私の手を引き、勝手を知ったように中に入っていく。外国人の書斎に来たところで、笑いながら外国人に挨拶し、そして座って外国人と外国語を話しながら、私を抱き上げて椅子に座らせた後はもうお構いなしだった。その外国人は角ばった顎髭を生やし、生粋の中国語を話すことができた。「お嬢さんは今晩は帰らないんだよ、ここにお泊りだ」という。本当なのか冗談なのかが分からず恐ろしくなった。しかも私は背が低かったので、椅子に座ると両脚が床につかずなんとも居心地が悪かった。

ようやく黄昏時になった頃に父さんと母さんが揃ってやってくるのが見えた。二人はトランクを山ほど積んだ人力車数台を引き連れ、蔵明（我が家の古くからの使用人）が大事な七妹を、蔵媽（蔵明の妻）が世話を焼いている上の弟の宝昌を抱き、三姉が下の弟保俶の手を引き（弟の乳母は残ることなくすでに暇乞いしていた）、と大家族の揃い踏みだった。ところがこの時三伯伯の姿が見えなくなり、続いて父さん、母さんそして皆が部屋の奥のどことも知れぬ場所に消えてしまい、私一人が廊下にポツンと残されてしまった。怖くて泣くにも泣けなかった。その後しばらくしてようやく三姉と我が家の小遣いさんの阿袁が現れた（「小遣いさん」とは使用人のこと、今日「小遣いさん」は存在しないだろう）。三姉は私を小さな中庭に連れ出すと、指差しをして「あたしたちはここに泊まるのよ」と言った。

私は一人の中国人の女性がそこの中庭で顔を洗っているのを目にした。顔洗い用のタオルを濡らし、眉を左右にさっさっと拭いている。なるほどこうするのか、今後顔を洗うときは彼女のようにしようと私は思った。三姉が私の服の裾をぐいぐい引くので、三姉の後について小さな応接間に入ったところでこう言われた。「もう大きくなったのになんて礼儀知らずなの。面と向かってじろじろ見るなんて、ばつがわるいでしょ」。私は心の中で、こういう女の人って、上の暮らしにも入れないし、下の暮らしに戻ることもできない、ああいった「ただ飯の阿マー」[34]、北京っ子の

謂う「炕に上がって下働きをしない女中[55]」でしょ、とわかっていた。でも三姉の言うことも間違っていない。私は弁解はしなかった。

小さな客間にはベッドが一つ用意されてあったが、幅が狭く、とても二人では眠れないものだった。それで私は卓袱台[56]の上で寝ることにした。身体が小さかったので卓袱台で間に合ったのである。

小遣いさんの阿袁の方だが、もちろん私たちと同じ部屋で寝るわけにはいかない。わたり廊下の欄干に渡した木の板の上で寝るしかなかったのだが、木の板の上は居心地が悪い。寝返りでも打てば転がり落ちてしまう。

阿袁は二晩こらえたものの、どうにも我慢できなくなった。しかも食べ物がますます少なくなり、誰もが空腹であった。阿袁は三姉に言った。「ここで寝るのはしんどすぎます。何でこんな目に遭わなきゃならんのです。うちに戻りましょう。あたしは料理はできませんが、餅[57]ぐらいは焼けます。うちに戻りましょう」

三姉と私は同意した。家に戻って普段着に着かえ、自分の部屋で寝る、本当にいい気分だ。

阿袁は一人で広い炕を独占して寝る。がらんとした広い屋敷でたったひとりで広い炕に寝るのである。阿袁は恐ろしくてたまらなくなった。烙餅を何枚か持ってまた外国人の家に戻ろうと考えた。

突然、ぱんぱんという銃声が聞こえた。阿袁は「まずい、張勲の兵士がやって来た、やっぱり外国人の家に戻りましょう」と言い、それで、私たち姉妹は阿袁の後について一緒に逃げ出した。三人とも、流れ弾に当たらないように腰をかがめていたが、途中半分ほど行ったところであたりが突然静かになった。しばし立ち止まっていたが、そのあとでまた自宅に戻ることにした。父さんも母さんも家に戻って来た。二人は自宅に戻る際、外国人の家の者に私たち姉妹がどこに行ったのか尋ねたところ、もうとっくに家に戻ったと言われたのである。しかし、二人は私たちがまさ

に張勲の兵士が銃を撃っていた最中に通りを走り回っていたことを知ることとなる。実に危ない状況だった。父さんの怒りは大変なものだった。阿袁は、旦那様が文字を習わせ勉強させるので大いに苦痛を感じていたため、これ幸いとばかり我が家を去って行ったのだった。

注

（1）一九一一年七月十七日に誕生し二〇一六年五月二十五日に亡くなったので、正確には満百四歳十ヵ月。中国では数え年を使うことが多いため、百五歳と表記されることが多い。

（2）〝絳〟は〝季〟の子音jiと〝康〟の母音angを組み合わせたjiangの発音を持つ。

（3）☆東呉大学校内誌『東呉年刊』一九三〇年第二期に発表した散文「倒影」の署名は「含真」。また一九四三年以前に発表した「収脚印」「路路」「陰」「風」等の散文や翻訳「共産主義是不可避免的嗎？」では本名の楊季康を使っている。

（4）河南省の貧しい農村地区に設けられた知識人労働改造所「幹部学校」でのおよそ二年にわたる体験を回想録として記した散文集。

（5）単行本として刊行された邦訳は次の通り。
『幹校六記〈文化大革命〉下の知識人』（中島みどり訳、みすず書房、一九八五）。
『お茶をどうぞ　楊絳エッセイ集』（中島みどり訳、平凡社、一九九八）。
『風呂』（中島みどり訳、みすず書房、一九九二）。
『別れの儀式　楊絳と銭鍾書　ある中国知識人一家の物語』（櫻庭ゆみ子訳、勉誠出版社、二〇一一）。

（6）「楊絳」『転形期における中国の知識人』（小谷一郎、丸山昇、佐治俊彦編、汲古書院、一九九九、三八四―四四四頁）、その他邦訳解説等。

（7）参考にした資料は主に以下の通り。「楊絳生平与創作大時記」『楊絳全集』（人民文学出版社、二〇二一、二九四―三六七頁）、呉学昭『聴楊絳談往事』（生活・読書・新知三聯書店、二〇一七）、田蕙蘭、馬光裕、陳珂玉編『中国現代文学史資料全編・現代巻　銭鍾書、楊絳研究資料』（知識産権出版社、二〇一〇）。尚『楊絳全集』は全九巻よりなる二〇一四年版と今回挙げた一〇巻本の二種類がある。後者には佚文が収められている。この他二〇〇四年に人民文学出版社より『楊絳文集』が刊行

されているが、『楊絳全集』『楊絳文集』ともに収録された作品に異動がある。

（8）　開明的な弁護士であった楊蔭杭については「楊絳の散文　その3」『慶應義塾大学日吉紀要　中国研究』第十六号（令和五年三月、一〇〇―一〇三頁）で一部紹介をしている。

（9）　楊蔭榆については「叔母の思いで」（（注5）前掲書『お茶をどうぞ』）、櫻庭ゆみ子訳「叔母の思い出」『浪漫都市物語』（丁ＩＣＣ出版局、一九九一）収録、また拙論「「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば―その1ニューヨークの楊蔭榆」『慶應義塾大学日吉紀要　中国研究』第二号（二〇〇九年三月、一―四〇頁）。「女校長の夢――中国女性解放運動先駆者としての北京女子師範大学校長としての楊蔭榆」『魯迅と同時代人』（汲古書院、一九九二）等を参照。

（10）　ここでの体験について晩年「我在啓明上学」と題したエッセイで懐かしそうに描いている。邦訳「啓明で学ぶ」は（注8）前掲邦訳「楊絳の散文　その3」に前半を掲載。日本・欧米の教育制度を参考に教育の近代化が進む中で町の立ち遅れた小学校と国際都市上海のミッションスクールとの違いが、少女の視線を通して鮮明に描かれる。過渡期の教育の状況が具象化されており教育の近代化を考える上で参考にもなる。

（11）　（一九一〇―一九九八）字は黙存。江蘇省無錫出身。中国の著名な学者兼作家。学術的著作に『管錐編』『談芸録』『七綴集』等、その他小説『囲城』、散文集『人・獣・鬼』等の作品がある。

（12）　楊絳自身はこれを処女作としている。人は死後に幽鬼となって自分が残した足跡を拾い集めて回るという言い伝えをもとに、魂が黄昏時からさ迷い歩く様子を想像して描いた秀作。作家人生の始まりに終末を見据えている点でも大変興味深い作品。

（13）　題名は『路路』に変更。林徽因は詩人、小説家、学者。一九三五年、「意識の流れ」の手法を用いて北京の人々の一日を描いてみせた前衛的な小説「九十九度中」を書いている。梁啓超の長男、梁思成と結婚し、清華大学建築学科の基礎を築き、中国伝統建築の調査整理に貢献した。清華大学では当初銭・楊夫婦と梁・林夫婦の家が近く、飼い猫をめぐる騒動を銭鍾書がフィクション化して短編「猫」に描いている。英語に流暢であった彼女と通ったミッションスクールについて以下にまとめてある。櫻庭ゆみ子「林徽因と培華女学校」『近代中国　その表象と現実』（平凡社、二〇一六、四〇―八〇頁）。

（14）　中国では「庚子賠款奨学金」と呼ばれる。一九〇一年に調印された「辛丑条約（北京議定書）」第六款をもとに一九〇八年より中国人学生を選抜し米国（後英国、ソ連、フランス、日本）の高等教育機関に留学させる制度。一九三〇年半ばまで続き中国の近代化に貢献した学者、教育家を多く輩出した。胡適は第二期の留学生。対英国では一九二七年より開始。一九〇九年に留米の学務所として設置され、一九一一年に、清華大学の前身、清華学堂となる。

（15）自筆及び一部タイプで残された銭鍾書手稿集は、主に読書感想や考えを述べた『容安館札記』（全三冊、商務印書館、二〇〇三）、経書、史書、諸子百家、文集、小説院本、童謡俚諺、野史等を含む一万五千頁にわたる中国古典詩文の読書ノート『中文筆記』（全二〇冊、商務印書館二〇一一）、本文で言及した『外文筆記』（全四八冊＋索引一冊、商務印書館、二〇一六）の三部からなる。銭鍾書この膨大な読書ノートが後の学術大著『管錐編』のもととなっていると言える。

（16）喜劇「称心如意」「弄真成假」「遊戯人間」、悲劇「風絮」。このうち作品の出来を不満として原稿を残さなかった「遊戯人間」以外は『楊絳全集』に収められている。

（17）邦訳は、新井健、中島長文、中島みどり訳『結婚狂詩曲』上下（岩波書店、一九八八）。

（18）文芸復興社刊行、月刊。一九四六年一月創刊、一九四八年八月停刊。鄭振鐸、李健吾等が編集に加わっている。

（19）（注5）前掲書『お茶をどうぞ』収録。

（20）一九四六年六月創刊、一九四八年九月、第二巻三期で停刊。

（21）張治「銭鍾書学案」『文学的異与同』（商務印書館、二〇一九）参照。

（22）朱経農、蕭乾等六名の編集委員の一人として銭鍾書は書籍の選択から翻訳のアドバイスまで深く関わった。

（23）John Hayward, *Prose Literature Since1939* (London: British Council, 1947). Hayward は T.S.Eliot の友人の批評家、編集者。

（24）張治「楊絳的《小癩子》与銭鍾書的《小癩子》（注21）前掲書『文学的異与同』収録。

（25）もともと娘のために銭鍾書が半ば創作しながら即興で面白おかしく話していたのを聞いて、楊絳が翻訳を決めたもの。

（26）一九六〇年代外国の美学及び文芸理論の著作を翻訳紹介する『古典文芸理論訳叢』が不定期刊行物として刊行され、その最終の第十一輯には中国科学院外国文学研究所外国文学研究資料叢刊編集委員会編の『外国理論家・作家論形象思惟』の上編が収録されている。この上編は「関与「形象思惟」的資料輯要」と題され、アリストテレスに始まり、モンテーニュ、パスカル、G. ヴィーコ、カント、ゲーテ、ヘーゲル、ボードレール等々西欧を代表する思想家、作家、詩人の文章がごく短い抄訳で紹介されている。編訳者は銭鍾書、楊絳、柳鳴九、劉若端。序にあたる紹介は銭鍾書の手になるものと思われ、また作家の選択や注釈全般を銭鍾書と楊絳が主導したという。『古典文芸理論訳叢』十一輯には楊絳訳のロペ・デ・ベガ（一五六二―一六三五）のマドリードの学会での講演「編写喜劇的新芸術」も収録されている。『外国理論家・作家論形象思惟』が下編を合わせて単行本として刊行されるのは文化大革命の混乱が収まりを見せはじめた一九七九年になる。これとは別に一九八〇年、『欧美古典作家論現実主義和浪漫主義』が刊行、編集者の説明によると一九五九年に準備された三十万字ほどの資料原稿をもとにし、ギリシャ、ローマ、英国、米国の部分を楊耀民が主だって楊季康（楊絳）と共に編訳し、銭鍾

書から貴重な意見を提供してもらったとある。銭鍾書は毛沢東選集の英訳の任務を終えて文学研究所に戻ってから外文組ではなく中国古典組に配属されていた。『外国理論家・作家論形象思惟』及び『欧美古典作家論現実主義と浪漫主義』の翻訳紹介から伺われるのは、言論統制が厳しさを増す中で、銭鍾書、楊絳等が政策に与しないぎりぎりの線を固守した学術的良心である。

（27）この顚末は「丙午丁未年紀事」（『収穫』一九九六年第六期）に記されている。邦訳は「丙午丁未年の年のこと」（注5）前掲書『お茶をどうぞ』収録。

（28）劉以鬯が主編集した「中國新文學叢書」第一輯全六冊のうちの一冊。楊絳著『倒影集』（香港文学研究社、一九八〇）。収録作品は「大笑話」「玉人」「鬼」「事業」、このほか付録として処女作「璐璐、不用愁」。

（29）楊絳著『春泥集』（上海文芸出版社、一九七九）。収録作品は「堂吉訶徳和《堂吉訶徳》」、「重読《堂吉訶徳》」、「論薩克雷《名利場》」、「斐爾丁的小説理論」、「芸術与克服困難—読む《紅楼夢》偶記」。「李漁論戯劇結構」。

（30）邦訳は（注5）前掲書『風呂』。

（31）一九九九年十二月十八日翻訳を終え、翌年、簡体字版が遼寧人民出版社より、繁体字版が香港天地図書公司より刊行。

（32）原題は『我們仨』（北京：生活・讀書・新知三聯書店、二〇〇三）。（注5）前掲書『別れの儀式』は邦訳のタイトル。

（33）『楊蔭杭集』全二冊（楊絳整理、張玉亮編集、中華書局、二〇一四）。

（34）楊必訳、『虚栄の市』の中国語の題名は『名利場』全二冊（人民文学出版社、一九七八）。楊絳の修訂版は『点煩本　名利場』全二冊（人民文学出版社、二〇一六）。楊一家の末っ子の楊必について楊絳は「記楊必」（邦訳は（注5）前掲書『お茶をどうぞ』収録）を書いて哀悼している。

（35）（注7）前掲書『楊絳全集　小説巻』収録。本編で実らせなかった恋愛を続編で大団円にまとめている。小説の構造としては本篇に劣るが、作者の特権で結末を変更して見せ、虚構なるものを読者に見せつけた楊絳の意地が見えておかしい。

（36）（注26）参照。尚、全集には収められていないが、帰京したエリートたちの間で起こった部屋不足のために、楊絳たちのもとの部屋の半分に住むことになった一家との間に起こった紛糾について『従〝掺沙子〟到〝流亡〟』（楊絳著、中国青年出版社、二〇〇〇）に描写がある。勝気な楊絳の一面が出ている。この顚末について李相「应该怎样对待专主得叙述—从杨绛与小凤得笔战探讨有关传记文学得创作问题」『河北学刊』（二〇〇〇年代十一期）参照。

（37）『走到人生辺上—自問自答』（商務印書館、二〇〇八）。

（38）香港の新聞『大公報』二〇一〇年七月四日に発表した「漢文」では、漢字の字体に言及し「我が国は典籍が豊かにある。

もし簡体字に字体を変えてしまったら意味が違ってしまう。幸い香港と台湾ではまだ中華古国の文字を保持しており、簡体に変えていない」とやんわりと簡体字について批判している。もっとも「漢文」を収録した『杂亿与杂写 一九九二―二〇一三』北京：生活・讀書・新知三聯書店、二〇一五）ではタイトルからすべて簡体字になってしまっている。

（39）一九八八年八月作。原題も「大王廟」、『雜憶與雜寫』（花城出版社、一九九二）収録。

（40）原文は「快点来看呶！梳则辫子促则腰裙呶！」原文にはこれが無色方言であるとして後ろに北京語の言い方：快来看哦！梳着辫子系着裙子哦！を載せているが、文字上はそれほど違いはないのでほぼ共通語の形で訳した。。

（41）中国の検索サイト「百度百科」によると、四枚の紙にそれぞれ〝官〟（役人）、〝打〟（用心棒、与力）、〝捉〟（警官、岡っ引き）、〝賊〟（泥棒）と書いて四人が引き、〝賊〟を引いたものが逃げ、〝官〟が〝捉〟に捕まえるよう指示し、捕まえたところで〝打〟に叩く刑罰を命ずるという遊び。

（42）原文は〝踢毽子〟。

（43）原文の直訳は、〝啦〟（第一声）と声を張り上げなければならなかった。

（44）「官話」のもととなる北京方言のいくつかの語彙は語尾を巻き上げて発音する。

（45）二〇〇〇年九月二十四日、八十九歳の時の作。（注38）前掲書『杂亿与杂写 一九九二―二〇一三』収録。娘の死（一九九七年三月五日）と夫の死（一九九八年十二月九日）の後、『パイドン』の翻訳を終えた後の作。悲しみが表面に出る父の死を悼む「難忘的一天」が書かれるのはこれより一年後。物語を語る行為が癒しになったのか。聞き語りの形で、ちょっとした小噺に仕上がっている。楊絳は、銭鍾書とともに論語の愛読者。基本的には「鬼神を敬してこれを遠ざける」（雍也六・二二）が、必ずしも人知を超えた現象を否定しない。

（46）楊絳によると、二〇〇五年から二〇〇七年八月にかけて死や魂の問題について論考している過程で生まれた散文という。

（注37）前掲書『走到人生辺上』収録。

（47）以下三作は（注37）前掲書『走到人生辺上』収録。それぞれ原題は（一）「穷苦人」、（二）「吃施粥」、（三）「〝瞎子饿煞哉〟」（上海方言）。

（48）当時楊絳、銭鍾書夫婦と娘の銭媛が間借りしていたのが現在の長楽路五七〇弄内にある蒲園街八号の建物の三階。

（49）未詳。

（50）《文匯報・筆会》二〇一〇年二月二十四日に掲載。（注38）前掲書『杂亿与杂写 一九九二―二〇一三』収録。楊絳九九歳の時の作。異世界との遭遇は「遇仙記」等他のエッセイにも出てくる。

（51）　銭鍾書が湖南省にいた時期に書いたと思われる創作「魔鬼夜訪銭鍾書先生」『写在人生辺上』（上海開明書店、一九四一）に他の九篇のエッセイと共に収録。内地にいる銭鍾書のもとに立ち寄った悪魔と交わす軽い会話中心の小噺風散文。文学史上現れた悪魔についての蘊蓄も披露されている。

（52）　「憶孩時（子ど時代の思い出）」『文匯報・筆会』（二〇一三年十月十五日）掲載。（注37）前掲書『走到人生辺上』収録。五話ある話のうちの第四話。次の「張勲復辟」は第五話。

（53）　原文は〝騾馬車〟つまりラバで引かれる車。

（54）　原文〝搭脚阿妈〟。

（55）　原文は〝上炕的老妈子〟「炕に上がった召使」、主人相手の夜のつとめも含めた身の回りを世話する召使。

（56）　炕の上で使う足の短いテーブル。

（57）　小麦粉から作った平たいお焼き、主食ともなる。